研究課題　中世大和国宇智郡関連史料の研究資源化―栄山寺を中心に―

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　下村周太郎（早稲田大学文学学術院・准教授）

　所内共同研究者　菊地大樹・尾上陽介・木下竜馬

　所外共同研究者　高木徳郎（早稲田大学教育・総合科学学術院・教授）・山崎竜洋（五條市教育委員会文化財課文化財保存係）

研究の概要

（１）課題の概要

　大和国宇智郡（現・奈良県五條市）は、大和国の南半分を占める吉野郡と河内国および紀伊国と境を接する「国境地帯」であり、大和街道（古代下ツ道）と吉野川とが交わる交通の要衝ともなっている。平安期は興福寺の影響下にあったが、中世になると高野山（真言宗）や葛城山（修験道）など多様な宗教的要素が入り込んでくる。また、南北朝期には南朝の、室町期には河内守護畠山氏（いわゆる分郡守護）の支配を受け、戦国期には国人や地侍による「惣郡」の一揆が結ばれたことでも知られている。  
　本研究では、上記のように宗教的・社会的にも政治的・軍事的にも特色あるフィールドとなっている中世宇智郡に関する史料の研究資源化を目指すが、特に栄山寺を調査対象の中心に据える。藤原武智麻呂の創建と伝えられる栄山寺は、奈良時代に遡る全国的にも屈指の古刹であり、古代以来の古文書や金石文を伝えているが、現在は所蔵先が分散している。また、近世・近代に調査が入り、文書の写本も数多く作成されたが、全体像を完全に把握するには至っていない。こうしたことから、栄山寺文書の諸写本、栄山寺文書以外の同寺関連史料、栄山寺の金石文などの調査を軸に、宇智郡関連史料の研究資源化に取り組む。

（２）研究の成果

　栄山寺五輪塔群については、すでに戦前から存在が知られており、史料編纂所には紀年銘のある一石五輪塔の拓本が架蔵されている。加えて、戦後にも『五條市史』において調査報告がなされている。これらの内容はおおむね一致するが、後者には一部新出史料も含まれていた。しかし、その後は調査が実施されておらず、無紀年銘五輪塔を含む全貌や現状について悉皆的な調査が望まれていた。とくに、文書や近代にいたる記録および、現地景観とこれらの金石文を詳細に対照することにより、従来知られていなかった中世栄山寺に関する新たな事実の発見が期待される。  
　今回の悉皆調査により、まず栄山寺一石五輪塔群の現状を全面的に把握することができた。戦前以来、逸失したものはわずかであり、同五輪塔群全体の保存状態が比較的良好であることが確認された。また、従来の調査はおもに紀年銘が完全に残っているものを対象としていることが分かった。すなわち今年度の調査により、干支のみあるいは人名のみの銘文をあらたに多数見出している。  
　同五輪塔群全体の紀年銘や特徴から、製作時期は15世紀末から16世紀に絞ることができることから、多くの干支については具体的な年次を推定できる。また、文書と照合した結果、一部の銘文に現れるのと同一人物の名が文書に見えることも明らかとなった。ここから、同五輪塔群の造立主体やその階層を新たに推定することが可能となったのに加え、文献史料と相互に関連づけることにより、栄山寺の寺内組織や複雑な宗派的動向、寺辺民衆の寺内への関与のあり方など、さらに豊かな中世栄山寺の歴史像を復元する方向に展開することが予想される。